

耕す

“People who cultivate” Number 08

最終回

写真・文 太田 順一

人々

農業で第二の人生を「至福の時」に



Takigawa Yasuhiko

瀧川泰彦さん、75歳。大阪から移住。

米づくり塾・塾長。

「都会ではネオン街で1時2時の生活でしたが、
ここではウグイスの声で毎朝起こされています」

和歌山県日高川町^{ひだかがわちょう}は、温暖で風光明媚な山あいの里。

県のほぼ真ん中に位置し、大阪からだと車で2時間の距離だ。

安珍清姫^{あんちんきよひめ}の物語で有名な道成寺^{どうじょうじ}があることで知られるが、

近年は田舎暮らしに憧れる都市住民にとって絶好の移住地として注目を浴びる。
その高い人気は、受け入れの窓口となって移住者を手厚くサポートしてきた

「ゆめ倶楽部21」の功績によるところが大きい。

今までにU・Iターンしてきた人は200人にもものぼる。



Hosoki Takao

細木貴夫さん、64歳。大阪から移住。
古民家レストランの「まる貴(たか)」は、
築130年の家をひとりでこつこつと改修してできた。
「趣味というのか、はまってしまったんですな」
ジビエ(猪、鹿などの野生鳥獣肉)料理が専門で、
完全予約制。



Kijima Kenichi

木島賢一さん、44歳。神奈川から移住。
いちご園で研修中。起業したくて外資系会社を辞めた。
「みかん・梅の和歌山で、いちごをブランド化したいです」
この夏、独立する。



Kagami Taeko

各務耐子さん、76歳。
大阪から移住し、農家民泊を営む。
「台湾から高校生も来て、別れるとき私を、
お母さん！って呼んで大泣きする。
たった1泊で情が移るのね」



日高川町。面積の9割が森林。
1991年、過疎化による休耕田を宅地に転用し、
菜園付き住宅を格安で販売した。
これが人気移住地となるきっかけ。



Yamamoto Toshiharu

山本敏治さん、62歳。
大阪の大手電機会社を定年退職。
「農業のいいところは、雨の日でも雪の日でも
何か仕事があること。毎日、生きがいを感じます」

「ゆめ倶楽部21」は、都会から人をもっと呼び込んで山里を活性化させようと、日高川町の旧住民だけでなく移住してきた新住民、それに行政なども加わって2002年に発足した。田舎暮らしのセミナーや体験ツアーを催して移住の相談にのり、短期滞在の世話をしたり、定住のための空き家の紹介もする。

倶楽部の創設時からのメンバーである瀧川泰彦さん(元)は、移住者組のひとりだ。大阪の大手化学会社の部長をしていたが、田舎でのんびり過ごしたいと思い、1999年、定年を機にイターンしてきた。

農業をするつもりはなかった。新築した家の前には釣りをするのに最適な川が流れ、近くには温泉、ゴルフ場である。三拍子そろった理想郷に来たわけで、「こりゃあ、毎日、楽しめるぞ」とゴルフ場の会員権も買った。

ところが、である。隣の大きな家に住む地主が急死して、奥さんから「主人に代わって田んぼをやってもらえませんか」と哀願された。他の移住者とも相談して3人で引き受けることにした。農業経験ゼロのド素人だが、3人でなら何とかかなりそうな気がしたのだ。

「ゴルフのクラブを鍬に持ち替えたんですな。同じ球をたたくのなら、地球のほうをたたこうかと思って。アハハ」

悪戦苦闘、そして失敗の連続。が、持ち前の研究熱心さをフルに発

Ohta Junichi

おおた・じゅんいち／1950年、奈良県生まれ。早稲田大学政治経済学部中退、大阪写真専門学校(現・ビジュアルアート専門学校 大阪)卒業。第12回写真の会賞、日本写真協会賞第1回作家賞、第34回伊奈信男賞受賞。おもな写真集は『大阪ウチナナンチュ』『群衆のまち』『父の日記』(以上、プレーンセンター)『ハンセン病療養所 百年の居場所』(解放出版社)など。著書に『ぼくは写真家になる!』(岩波書店)。



Suzaki Yasuhiro

壽崎泰博さん、48歳。大阪から移住。
法学部卒の元システムエンジニア。
「木を切り倒すのは職人的な技が必要で、
そこが難しくて。でも面白いですよ」



Andai Takao & Toyoko

安大孝夫さん、52歳。豊子さん、51歳。
大阪から20年前に移住し、パン工房の「こむぎっ子」を営む。
「24時間、笑顔でいようね」といって合ってます」
両親のその楽しそうな仕事ぶりを見てだろう、こちらに来てから
生まれた男の子が、自分もパン屋をしたいといい出した。

日高川。町の真ん中を流れる。
自然体験、田舎暮らし体験の観光プログラムが
60種類も用意されていて、
毎年2000人を超える人が訪れる。

連載もこれが最終回。振り返れば、取材で会ってきたのは前向きな人ばかりだ。
〈農業で食べていきたい〉とひとりで種まきをする女性、〈楽しく農業をやりよう〉と感性豊かに有機農法に取り組む若者たち、〈農家も営業をしないと〉と消費者とのコミュニケーションに努力する農家組合……。まさに硬い地面を「耕す人々」だ。農業の現状については悲観的なニュースが多い。しかし私は「耕す人々」と出会って、農業の今後にむしろ期待感をもった。

あとがき

農業の経済と歴史を学び、「米づくり塾」を事例研究にして修士論文を書き上げ、今春、最短の2年で卒業した。受講した14科目はオールAである。——新天地で送る第二の人生は、今、たわわな実りで輝いている。

「塾長として人に教えてるけど、知識がないのも言えませんがね。アハハ」
今やプロの農業人となり、自身のブランド米「あやめしぐれ」はすぐ売り切れるほど人気を呼んでいる瀧川さんだが、思うところがあって和歌山大学の大学院に入学した。
「塾長として人に教えてるけど、知識がないのも言えませんがね。アハハ」
今やプロの農業人となり、自身のブランド米「あやめしぐれ」はすぐ売り切れるほど人気を呼んでいる瀧川さんだが、思うところがあって和歌山大学の大学院に入学した。
「塾長として人に教えてるけど、知識がないのも言えませんがね。アハハ」
今やプロの農業人となり、自身のブランド米「あやめしぐれ」はすぐ売り切れるほど人気を呼んでいる瀧川さんだが、思うところがあって和歌山大学の大学院に入学した。

「ゆめ倶楽部21」

「ゆめ倶楽部21」は農家民泊など
体験型観光にも取り組む。
事務局は日高川町役場まちみらい課内。
TEL／0738-54-0338